

## サガの史的価値

— free-prose・book-prose 理論再考 —

古川 まゆみ

### I はじめに

ほぼ北極圏に接する北大西洋上の孤島、アイスランドで生まれたサガ<sup>(1)</sup>は18世紀後半に入って注目を集めて以来、古代ゲルマン人の生活や思想をそのまま記録した歴史書<sup>(2)</sup>、特定の作者による創作品<sup>(3)</sup>という相反する評価を経て、現在では構造分析、口承の場の問題、ジャンル分けの再検討等の点から考察が進められている<sup>(4)</sup>。しかし、サガ研究史を概観した場合、これ迄の課題で最も注目すべきものが19世紀半ばから約1世紀弱続いたいわゆる free-prose 理論と book-prose 理論の論争<sup>(5)</sup>である点は明らかであろう。この問題は近年その論争が不毛であることが認識され<sup>(6)</sup>、考察の対象外に置かれているのが実情だが、他に例を見ないほど長期間に渡って研究者の関心を引いてきた事実はやはり特記すべきことと思われる。現在 free-prose、book-prose 理論については、19世紀以降のサガ研究者をそのどちらかのグループに分類し、双方の理論について簡単な定義を付すに止まっている<sup>(7)</sup>。このことはこれ迄のサガ研究過程を考慮した場合、妥当な対応と判断できるが<sup>(8)</sup>、他面、あれほど長期間に渡った論争をその中身、展開過程を深く検証することなく、Nordal が言うように「古代北欧文学史上、憂うべきこと<sup>(9)</sup>」として、今日その内容を顧みないことも問題があろう。多くの識者が現在考えるように free-prose、book-prose 論争は確かに永遠に解決できない類いであり、今日我々がどちらかのグループに加担してこの問題に固執したならば、それは完全に無意味である。しかし、結果的には不毛だったものの、この論争により

サガの史的価値についての認識がある程度定まったことは評価されねばならない。そこで今日この論争を当事者としてではなく、客観的立場にいる第三者として再検討してみる時期にきていると考える。すなわち、当時のサガ研究者の論述をどちらの側にもくみすることなく考察することにより、彼らがサガの史的価値についてどのような見解を持っていたかを改めて詳察してみたいと考えるのである。その際、対象となる資料がfree-prose 理論優勢の頃といわれた19世紀後半から20世紀初頭にかけての論文であることを断っておく。<sup>00</sup>

## II 研究概観

a <サガについて> まず始めにサガについての定義、種類、成立状況など若干記しておきたいと思う。本稿で使用されるサガという言葉は現存の記述されたサガを指す。<sup>01</sup> 通常、サガについては様々に説明がなされているが、総じて書き留められたもの、散文という特質が挙げられている。

「segja (英語の say の意) と関連のあるサガは、その長さ、または文学的志向性に関係なく、本来どんな形式の物語や記録にも適応されるアイスランド語である。しかし、今日では、中世に書かれた広範囲な小説的散文を示す言葉になった。」<sup>02</sup>

「サガとは、その中身が実際の出来事、または作り話であるにしろ、あらゆる種類の物語、記録を指す言葉である。」<sup>03</sup>

「サガ saga は『語られたもの』というほどの意味の語で、これを広義に用いる時は散文で書かれたすべての叙述を含ませることができ、その中心をなすのは歴史的イベント、ないし人物の散文物語だとすることができよう。」<sup>04</sup>

サガの数は 200 ほどあるとされるが、1つのサガが複数のサガから集成されていたり、題名のみが伝わり、テキストは散失してしまったなどの事情によって正確な数は把握されていない。<sup>05</sup> 同様に分類に関しても研

究者によってその基準は内容、文体などとまちまちで今後とも統一した見解は望まれていない状況にある<sup>68</sup>。しかし、概してどの分類の中にも必ず一項目設けられているのが「ファミリーサガ」、「アイスランド人のサガ」と呼ばれる部類である。これに属するサガは文学的質の高さ、題材をキリスト教改宗以前の生活に採っているという内容の面白さの点でサガの中でもよく親しまれている。本稿で後に取り挙げる free-prose, book-prose 論争の対象となっているのも主にこの部類に属するものである。

サガが書き留められた時期については12世紀から14世紀初頭と考えられているが、ファミリーサガなどサガの代表作が出現して隆盛を誇ったのは13世紀である<sup>69</sup>。サガ成立の背景としては、王権とキリスト教の圧迫を嫌ってこの島に移住した人々の、自己の誇りとする古伝承をできるだけ忠実に維持、保存しようとした心意<sup>70</sup>からも説明がつくが、それ以上にサガという当時稀にみる質の高い散文<sup>71</sup>を生み出したアイスランドの成熟した文化的、学問的土壌も顧慮しなければならない。

Jan de Vriesは、12世紀にはアイスランドに幾つかの修道院が設立され、スカラホルトとホラルの司教区では若い聖職者達がラテン語で規則的に教育を受けていたと述べている<sup>72</sup>。当時の有名な作家である Gregorius, Bedaなどは、外国に留学、或いはローマ巡礼をした聖職者らとその写本を島に持ち帰り、ラテン語からアイスランド語へ活発に翻訳を行ったことにより島では既に知られていた<sup>73</sup>。Bedaの「教会史」などは、祖国ノルウェーの歴史やアイスランド開発の歴史をできるだけ忠実に書き残そうとしていたサガの作者達の参考にされたと考えられている<sup>74</sup>。そのほか聖書解説、説教、使徒伝なども優先的に翻訳された。これらは礼拝の際、一般の人々に信仰とモラルを教えることに役立った<sup>75</sup>。このように12世紀には多数の宗教書がアイスランドに入ってきたのだが、それはサガ研究の重要な誘因となった<sup>76</sup>。当時のアイスランドはノルウェー出身の豪族の子孫によって植民されていたが、彼らにとって自国語で家族の伝承、祖先の偉業などを書き留めておくことはアイスランドでの名声を高めるの

に有効な手段だったからである。

さて、このようにして書き始められたサガが最盛期を迎えるのは前述の通り13世紀である。サガの傑作といわれる「5大サガ」<sup>66</sup>もこの時代に成立した。12世紀に書かれたサガが歴史書を意図していながらもまたキリスト教の聖人伝の影響が強いのに対し、<sup>67</sup>13世紀に入ると筋の展開、構成の力強さ、内容の面白味の点から近代文学を想起させる芸術的散文の域に迄達するようになってきた。この為この時代は学芸の最盛期と位置付けられているが、アイスランド史上政治的・社会的にも大変混乱した時代であった。アイスランドはもともと共和国<sup>68</sup>として成立したのであるが、12世紀初頭からほんの一握りの有力な首領が島の運命を左右するようになり、彼らの勢力争いで島は慢性的不安定な状態に陥っていたからである。<sup>69</sup>結局、1262年頃ノルウェー支配下に入り、1281年、ノルウェーの法律が導入されると共和国は滅亡し学芸も急速に衰えていった。他のヨーロッパ諸国では例を見ないほど早くから自国語による優れた散文として登場したサガもその隆盛期は僅か1世紀にすぎず、その後は18世紀後半に至る迄顧みられなくなってしまうのである。

b <19世紀半ばから20世紀前半にかけてのサガ研究> さて、以上のような過程を経てサガが再び注目されるのは18世紀後半に入ってからである。その契機については「18世紀からの浪漫精神、殊にドイツ浪漫派の勃興によってある意味で昔の異教精神が復権せしめられた」<sup>66</sup>とされているが、大陸ヨーロッパにおける当時のナショナリズムの動きも考慮しなければならないだろう。すなわち、ウィーン体制から抜け出して国家統一を図ろうとしていたドイツ、イタリアは同じくデンマークの植民地下にあって国家独立を果たしていなかったアイスランドの共感を買うところとなったのである。サガ復活の動機が文学的関心のみならず、時の政治状況とも関係していた点は銘記しておかなければならない。<sup>69</sup>

19世紀から20世紀前半にかけてのサガ研究の特色は何といてもサガを歴史書と位置付ける見方が主流であった点である。後に指摘するよう

にこれに反対したり、サガが歴史書であるという立場をとりながらもその文学性・創作性も認めていると思われる研究者も存在したが、歴史書としてのサガの信頼性を崩す迄には至らなかった。当時の研究者としては W. Ker, A. Heusler, R. Meissner, K. Liestøl 等を挙げることができるが、彼らはサガの中の史的価値を積極的に支持している。例えば Ker は、中世のアイスランドがロンドン、パリと比較すると野蛮であることを指摘し、そのような昔ながらの共同体の中には古代ゲルマンの生活が保持されており、それはサガの中に再現されていると述べている<sup>82</sup>。Heusler は、サガを口承起源とし、サガに語られている事件とそれが文字に書き留められた時期との時間的ずれを教育された記憶力から説明している<sup>83</sup>。彼はサガが人々に語り継がれていくうちに改作されたことは認めながらも、それは専門家の手を通してあるので、より歴史に近付いたという見方をとっている<sup>84</sup>。Meissner もサガの最初の記録者が聖職者であった可能性は強いとしながらも、それはただの書き手(Schreiber, Aufzeichner)であり、材料・文体の状況からサガの口承性を強調している<sup>85</sup>。Liestøl はサガが口承から発生したと理解はするが、作者による事件の選定があったことを認めている。しかし、サガの史的価値がそれによって下がると考えていないところは Heusler と同じである<sup>86</sup>。このような19世紀以降のサガ研究は「アイスランドサガの歴史性を頑として固執したので、かなり長い間、口承か否かの問いがサガ研究の中心課題となってしまう、それが後に大いに批判されることになる<sup>87</sup>」との Baetke の指摘をよく示しているよう。

ところでこの頃の研究者がなぜ、サガの口承性、歴史的信頼性を上述のように固執したかをここで説明しておかねばならない。それは現代でもサガの特徴として必ず挙げられる「事実をできるだけ忠実に客観的に記述するスタイル(文体)」<sup>88</sup>にある。Liestøl はサガの文体を「退屈なまでの同じような言い回し<sup>89</sup>」と評しているが、この文体の単調さの原因を「話者の記憶の中に同種類の幾つかの話が並存」、「同じ話が多く語り手に

よって語られている<sup>60</sup>」ことから説明する。そして「口頭伝承の伝統が強ければ強いほど頻繁に事件は語られ、語り口が平易であればあるほど、それが文字通り人々の記憶の中に入っていく、昔ながらの口承のスタイルは固定され守られる(すなわち、歴史的事実が保存される)<sup>60</sup>」と結論する。有名なサガの客観性についてもこのような無駄なものを落としていく過程(Abschleifungsprozess)の結果と見なす<sup>60</sup>。文体や構成の簡潔さがサガの史的価値を高めていると考えるのはA. Buggeも同様である。彼は、道徳めいた長たらしい中世ラテン語の散文とは根本的に異なり、サガの中に重要でないものが決して詳細に記録されていない点を高く評価している。そしてこの文体が昔のゲルマン人の口承と類似性があると考え<sup>60</sup>。このほか当時の研究者がサガの口承性、歴史性を主張した理由として、サガの作者が知られていない、すなわち匿名であることが挙げられている。サガの作者は自分自身が物語の創作に責任があると考えていないので(事実と思われる事柄を書き留めたただけなので)、匿名にしたというのである<sup>60</sup>。これも王のサガ以外は作者が知られていないため、かなり説得力を持った意見であった。

さて以上が、「サガに描写されている時代の出来事は、事件のすぐ後に固定した様式の中に保存されて人々の記憶に残り、代代口頭伝承されて最終的には13世紀に記録されるに至った。」と説明されている free-prose 理論の概要である。

これに対して20世紀半ばになると、サガを信頼のおける歴史書ではなく文学的才能に恵まれた作家による創作品という見方(book-prose理論)が優勢になってきた。そこではそれ迄の口頭伝承に重点を置いた研究姿勢が厳しく批判され、サガの芸術性に関心が移されるようになってくる。book-prose論者は植民時代からアイスランドに口頭伝承の慣習が存在し、その一部がサガの中に取り入れられた可能性は否定しなかったが、口承形式の一般化、過度の単純化を疑問視した<sup>60</sup>。文学的活動は常に才能ある個人の作家の仕事であり、各サガの中に登場人物の性格が独特に記され

ていると見なすのである。<sup>47)</sup> このことは匿名故に作者不在と解し、サガを歴史書と位置付けていたそれ迄の見解と大きく対立することになった。book-prose 論者としては、S. Nordal, E. Sveinsson, W. Baetke 等多数挙げることができるが、ここでは本稿の考察対象の時代から外れるため、細部に立ち入らず、free-prose 理論との相違点を上記したに止めておきたい

### III free-prose 理論再考

前章にてサガ研究の流れを概観してきたが、その結果、20世紀前半迄の研究者の見解がサガの内容を史実と考える傾向にあったことが明らかになった。この傾向は Nordal が1940年に論文“Hrafnkatla”にてフランクセルサガの文学性を例証して以来急速に衰え、現在に至っている。いわゆる free-prose 理論は今日では劣勢であり、その論者と考えられた当時の研究者達の論考を顧みることも少なくなっている。しかし改めて彼らの論述を再検討してみると、サガの史的価値に対する評価や信頼性の度合が決して一様ではなく、微妙に揺れ動いている様子が浮き彫りにされる。本章ではその様相を考察してみたいと考える。

a <free-prose 理論の非均質性> Baetke は「アイスランドサガが口頭伝承から何らかの形を伴って発生してくるという教義を通常『free-prose 理論』と記しているが、この理論は何度か変更され、それぞれの時点でその意見は異なっている。」<sup>48)</sup>と述べている。このことは当時の論稿を読んでみると正に的を得ている。初期には R. Keiser のように口承のサガが一字一句書き留められて今日に至ると考えられていたが、20世紀も前半を過ぎると極端な口承性は唱えられず、E. Jónsson などは Keiser を free-prose 理論から除外している。<sup>49)</sup> サガの成立に関しても基本的には口承起源で一致しているが、その状況、記述者については意見が別れている。例えば Jónsson は短いサガは口承から生まれたとするものの、比較的長いサガには別の発生源を主張する。<sup>50)</sup> 発源地についても Bugge はイ

ギリス、オークニー諸島等バイキング植民地を挙げ、その際アイルランドの散文の影響も考慮するが、<sup>61</sup> Heuslerはこの点に同意するものの、JónssonはBuggeの説を根拠なしとして否定している。<sup>62</sup> サガの記述者に関してもJónssonは今日定説である修道僧と見なすが、<sup>63</sup> Heuslerはアイスランドにおいて昔から貴族や大農場主の回想録を書いていた年代記作家とし、世俗出身者を強調する。<sup>64</sup> Liestølも同様にサガの記述された写本は修道院の図書館ではなく、民衆の間で保存されたと考える。<sup>65</sup> 記述の際の書き手による故意の内容変更も、初期の学者であるMeissnerは認めないが、<sup>66</sup> 20世紀以降のHeusler、Bugge、Liestøl、Jónssonらは記述者が機械的な書き手ではなく、口承されたものの取捨選択を芸術的手腕で積極的に行ったと見ている。<sup>67</sup> 記述者についても年代記作家が散文作家に成長したとHeuslerは考えるが、Jónssonはこれに反対する。<sup>68</sup> このようにfree-prose論者に数えられている研究者もサガの口承性を基本的に認めるという以外はその内部において意見が微妙に異なり、互いに論戦を展開していた点は注目に値しよう。

b 〈歴史性と文学性〉 さて以上、free-prose論者と考えられている研究者の見解が外見ほど統一されていないことが明らかになった。次に彼らの論述の中で注意を要する点を挙げてみたいと思う。

その第1は口承の状況についてである。前節で言及した通り、20世紀に入るとKeiserやMeissnerのように口頭伝承をそのまま細部漏らさず書き留めたものをサガとする考えはfree-prose論者の間でも斥けられるようになった。Liestølはサガには写本が多数存在し、今日残っているものは原本とはかなりかけ離れた写本の写本であることを指摘している。<sup>69</sup> これらの写本は手本を元にしていて、書き手はその際口承についてかなりの知識を持っていたため、自分の記憶から手元の写本を改作することもしばしばあったと述べている。<sup>70</sup> そのため、現在のサガは純粋な写本、その改作、昔からの口頭伝承の合作としている。<sup>71</sup> Heuslerも長い話の口頭伝承が完全に保存され、繰り返されることは当時望まれず、専門的知



識を持った書き手が芸術的、或いはより信頼のおくものにさせる意図で手を加えたことを認めている<sup>62</sup>。両者に共通していることは、改作をサガの史的価値にとって肯定的に捉えている点であろう。Heuslerは、書き手の魅力的なものを強調したり、資料を選別したりすることによって、サガの中身が大切な内容だけ残った状態で簡略化されていくと見る<sup>63</sup>。Liestølもファミリーサガの写本には多数の歪みがあるので内容の修正、省略、拡大等を考慮しなければならないが、人間は第一に重要な事を記憶する性質を持っているため、名前や個々の言葉等を誤記する程度で、話の筋は変わっていないと判断している<sup>64</sup>。

このように free-prose 論者といえども、口頭伝承にかなりの改作を認めている点は注意を要するべきであろう。更に我々は上記した Heusler の芸術的という言葉に注目してみたいと考える。彼はそこでサガが芸術的意図で改作されたと述べているが、これは彼がサガの文学性を示唆しているとの解釈も可能だからである。サガの文学性——それはサガを歴史書と見なす姿勢と矛盾しているという印象を受けるが——実はこれは Heusler のみならず、他の free-prose 論者の論述の中からも見つけることのできる表現なのである。そこで次にこの点を見ていきたいと思う。

サガの文学性を示唆しているのは、その歴史的信頼性を高く買っている Ker の論述からも散見できるが、何よりも同時代の Bugge がこれを明白に表現している。彼は「アイスランド・サガほど現代の話者を感動させる中世文学もない」と述べ、サガの中に出てくる会話、ユーモア、適切な言葉使い等が劇的で、中にはかなり洗練されており、その文体を芸術的と見なしている<sup>65</sup>。「サガとはおのおのの物語が芸術的に完成された時、サガと呼べる」とし、サガの母体をメルヘンと考える<sup>66</sup>。サガの文体、ユーモアを、同じく劇的で短い粗野な言葉で語られているメルヘンからの借用と見るのである<sup>67</sup>。この観点に立ってサガの虚構部分を見分けるにはメルヘンの3回の法則が有効と考える<sup>68</sup>。

Liestøl もサガが芸術用式に合うような材料を選択したことにより、か

なり芸術度の高い個人的・文学的作品になっているものがあることを認めている。<sup>69</sup>例えばニャールのサガやラックス谷のサガは同じファミリーサガの中でも口承をそのまま記述したレイクグラサガとは性格を異にし、作者達は興味のあることすべてを詳細かつ効果的に書こうと試みたとしている。<sup>70</sup>その際、外国の影響で文学の基準が既に生まれていたため、口頭伝承の忘却を防ぐという目的で記述されたサガも、最終的にはニャールのサガのような個人の芸術作品、すなわち創作品という形をもって完了したと結論する。<sup>71</sup>また彼は Bugge と同様サガとメルヘンの類似性を指摘し、メルヘンの自分自身の立場、感情を表さない特質がサガと共通したものと考えた。<sup>72</sup>

Heusler もサガの文学性を認めている。彼はサガがアイスランドに古くから伝わる家族の年代記から生まれたと考えるが、その年代記は最初小説を目指したと理解する。<sup>73</sup>豪族達にとって土地や家の年代記は最大の関心事だったが、それは人々の前で語られる必要もあった。より印象的にするため、娯楽的要素が取り入れられ、それがサガにつながっていく。このため彼はサガを小説と明言する。<sup>74</sup>そしてサガには内面生活の幾つかの部分を伝達したり、人間を実際よりも生き生きと見せる働き等、娯楽性が内在していると述べている。<sup>75</sup>

さて以上のような見解はサガを信頼のおける歴史書と見なす free-prose 理論と矛盾しないだろうか。そこで今度は free-prose 論者の中でこれをどう説明しているかについて見ていきたいと考える。まず、Heusler のサガの分類に着目したい。彼は上述のようにサガの文学的芸術的特質を認めた上でそれを 2 種類に分類している。すなわち、口頭伝承をそのまま書き留めたもの<sup>76</sup>と、13世紀以降の芸術的用式にまで発展した文学作品のサガの 2 つにである。この考えは口頭伝承が突然芸術に昇格したことを意味するとして、Jónsson から激しく批難される<sup>77</sup>が、上述した free-prose 理論内部の矛盾を克服しようとする試みがよく表れているのではないだろうか。同様のことは Liestøl からも指摘されているからである。

彼はファミリーサガの中には口承されたことをそのまま記した古いサガと、文学的色彩を備えたそれ以降の新しいサガという大別して2種類のサガがある<sup>68</sup>ことをやはり主張するのである。

しかし上述の説明も free-prose 論者が両方のサガをまだ歴史的に信頼のおけるものと見なすのであれば、このような分類によってもまだ free-prose 理論に内在する矛盾が本質的に解決されたと結論する訳にはいかない。実際彼らは文学的特質を備えているサガに対してさえ、相変わらずそれを文学と断定するのを極端に嫌っている。例えば Liestøl はファミリーサガにおいて個性的な登場人物や彼らの行動の中に作者の意向が十分反影されていることを認めているながらも、自分がそのことによりサガを文学と判断していると誤解されることに対して強く抵抗を示すのである<sup>69</sup>。それでは今迄述べてきた文学的特質にもかかわらず彼らがまだこのようにサガを大筋で歴史書と見なしている姿勢をどう解釈したらよいのであろうか。それを解く鍵として彼らの歴史概念に着目してみたい。

c 〈free-prose 理論の歴史概念〉 Heusler はアイスランドサガについて興味深い発言をしている。すなわち、サガの中には歴史的に信頼のおける箇所に作り話が入れてある<sup>69</sup>と言うのである。歴史書たることを印象付けるために非歴史的なものの補助が必要だったのであろうか。また、彼はサガに書かれている事柄が当時の法律や後世の記録から判断して信憑性の薄いものもかなり入っていることを認めている<sup>69</sup>。しかしこのようなサガを歴史書と位置付けるのに障害となる要素があっても「何の疑問の念も抱かせないものが真実であるとは我々はもはや思わず」、「サガにおいてこれは歴史なのである」とあくまでも歴史書たることを強調している<sup>69</sup>。ここでこのような歴史解釈を理解するため、Liestøl のファミリーサガの中に登場する夢や会話等の説明に目を転じてみることにする。

Liestøl はサガの中に登場する超自然的なもの(夢の前兆、予言、おぼけ、様々な幽霊等)が信頼性のないものとして取り扱われていることに強く反発している。彼は、サガが記述された頃の人々は何が本当でそうでない

かについての区別がなく、幽霊等、現代の我々の目には明らかに迷信と映ることもれっきとした現実であり、その存在を固く信じていたと述べている。<sup>63</sup>それ故、サガを語る者は物語に含まれている超自然的要素と他の材料との間に何の相違も見えておらず、両方とも歴史と見なした。<sup>64</sup>その意味ではファミリーサガの中に超自然的要素が入っていることはサガの語り手が任意に口頭伝承を変えたり、疑っていたりしたことを意味しない<sup>65</sup>ので歴史書と言える訳である。また、サガの芸術的目的にも役立ち、<sup>66</sup>通常のでき事を補充、説明する機能もあったので歴史書の中では自らの位置を確実に占めていたと述べている。<sup>67</sup>

さて、サガの非信頼性を主張する時よく引き合いに出されるのが数多い会話の場面である。しかしこれに対しても Liestøl は歴史家ヘロドトスが歴史上の人物に話をさせて歴史を書いていた例を挙げ<sup>68</sup>この批判をかわしている。会話の中には作者の歴史上の人物・事件についての理解が読み取れるので歴史書として問題はなく、我々はサガを現代の歴史研究基準で測るよりもサガの作者が歴史家の姿勢でこれを書いていた事実を重視すべきと説くのである。<sup>69</sup>そして歴史家は物事を抽象的に理解することを避けるため、歴史的事実を魅力的な言葉使いで詳述していたと述べている。このことはまた、Michelet の「歴史とは再活生である」という言葉がサガに当てはまるともしている。<sup>70</sup>

以上から本節冒頭で言及した Heusler の発言（「サガの中には歴史的に信頼のおける箇所を作り話が入れてある」）、ひいては free-prose 論者の歴史概念が明らかになっていくのではないだろうか。Heusler の発言は本稿で既述したサガの文学性を示しているが、その作り話の中には上述の超自然的要素、生き生きとした会話体も当然含まれよう。しかしこの作り話はサガが記述された時代の人々にとってはまぎれもない真実だったのである。Liestøl の言うように、サガを現代の歴史研究基準で測らず、中世の歴史観を通して理解<sup>70</sup>した場合、そのことは明らかになるのである。また、前節で問題にしたサガの文学性が歴史書たることと矛盾しな

いかという問いについても、サガの作者が歴史家として記述し、人々により印象付けるため芸術的手腕を用いたのであれば、いかに現代の基準で文学的に見えようとも歴史たり得るのである。このように見てくると「中世的な意味において歴史の中には同時代の文学や芸術も含まれる<sup>62</sup>」という free-prose 論者の歴史概念に着目する必要があることが明らかになろう。

#### IV まとめ

さて本稿冒頭で述べたようにこれまで free-prose 理論と book-prose 理論については前者をサガを歴史書と見なす立場、後者を創作品と見なす立場と簡単に説明され、サガの文学性が通説になった今日では両理論の対立にはあまり言及されず、特に free-prose 理論に関してはほとんど顧みられてこなかった。私は両論争の再燃を全く望まないが、両者が全く別の歴史概念を持ってサガの史的価値を論じていた点は、両理論を再検討する場合、今後銘記しておかねばならないと考えている。19世紀後半に出た Jessen<sup>63</sup>も20世紀半ばの Nordal<sup>64</sup>にしても book-prose 論者の論ずる歴史的信頼性は今日の我々の歴史概念を基にしているからである。また、free-prose 論者と言っても前述の通り、時代によってその主張する所が微妙に異なる点も注目せねばならない。彼らの論述の中には book-prose 論者と同じく、サガの内容を現代的な意味で歴史的信頼性のないものと見なしていることもあれば、歴史書たることに躊躇している場面もあるからである。そして今日低く評価されているほど彼らの理論は劣っていないことは、サガを読む際の彼らの歴史概念が注目に値することからも明らかであろう。

サガの史的価値は19世紀以降のサガ研究の中で長い間最も重要な課題であった。その際、議論をリードしていたのが free-prose, book-prose 両論であったが、今後はこの枠に囚われずサガの史的価値を再検討して見る必要があると思われる。

## 注

- (1) サガ(Saga)とはアイスランド語で「語られたもの」ほどの意味。詳しくは本稿 II a 参照のこと。
- (2) 本稿以下の free-prose 理論の考え方に対応する。
- (3) 本稿以下の book-prose 理論の考え方に対応する。
- (4) この例を示すものとして、Harris, Joseph, "Genre and Narrative Structure in Some Islendiga Pættir," *Scandinavian Studies*, vol. 44, 1972, pp. 1-27. や Scheps, Walter, "Historicity and Oral Narrative in Njals Saga," *Scandinavian Studies*, vol. 46, 1974, pp. 120-133. 等があるがより最近の研究書としては Lindow, John, *A New Approaches to Textual Analysis and Literary Criticism*, Odense Univ. Press, Odense, 1986. がある。尚、1970年以降の構造分析を中心とした研究動向については、拙稿「1970年代のサガ研究——構造分析を中心に」『ICU比較文化』第14号、ICU比較文化研究会、東京、1987年、でも紹介している。
- (5) free-prose 論者はサガがアイスランド、ノルウェーの口頭伝承を書き写したものでその内容を史実と考える。これに対し、book-prose 論者はサガには歴史的信憑性がなく、特定の文学的才能のある作者による創作品と見なした。始めは free-prose 理論が優勢であったが、20世紀半ば頃から逆転し今日に至っている。この2つの名称は20世紀初頭に A. Heusler が付けたものだが、当時の議論を整理するのに広く使われるようになった。
- (6) Andersson, Theodore, "The Icelandic Sagas," *Heroic Epic and Saga: An Introduction to the World's Great Folk Epics*, Indiana Univ. Press, U.S.A., 1978, pp. 151-152.
- (7) 例えば、山室 静『北欧文学ノート』東海大学出版会、東京、1980年、173頁や Andersson, *op.cit.*, pp. 149-151 など。今日論争への関心が完全になくなった訳ではないが(Scheps, *op.cit.*, p. 120), 双方の理論共難点があるので極端にまで片方に味方して議論することはない。(Andersson, *op.cit.*, p. 150)
- (8) free-prose, book-prose 論争があまりにも長く続いたため、サガ研究に新しい理論を応用しなかったことは現在批判されている。例えば Scheps は サガ研究に有効であった Propp の形態分析導入が遅れたのもこの論争のためと批難している。(Scheps, *op.cit.*, p. 120) このような事情を考慮すると、現代研究者の関心を引いていないことが理解できる。
- (9) Baetke, Walter, *Die Isländersaga*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1974, p. IX から再引用。
- (10) 現在2つの理論の中でも特に free-prose 理論はその主張が支持されていないため顧みられていない。しかし筆者は、当時の論述の中に簡単に free-prose 理論と片付けてしまえないような両義的性格を持つものもあることに気付いたので、今回はそれらを通して両理論再考の第一歩にしたいと考える。
- (11) 散文の形で書き留められる以前にアイスランド人の間で広まっていた口頭伝承

がサガと呼ばれていたというが(山室, 前掲書, 166-168頁。Bugge, Alexander, "Entstehung und Glaubwürdigkeit der isländischen Saga(1909)," *Die Isländersaga*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1974, p.68) それは今回の考察の対象とはしない。

- (12) Andersson, *op.cit.*, p.144.
- (13) Baetke, *op.cit.*, p.VII.
- (14) 山室 静『北欧文学の世界』東海大学出版会, 東京, 1969年, 111頁。
- (15) 同上, 169頁。
- (16) 従来は内容を基準とした分類が試みられていた。例: アイスランド人のサガ, 嘘のサガ, 王のサガ, 英雄のサガ (Heusler, Andreas, "Die isländische Saga: Ihr Werdegang (1943)," *Die Isländersaga*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1974, p.248)。しかし70年以降は文体 (Style) 基準の分類も出た。
- (17) サガの中で傑作といわれる作品が多い。アイスランドに初期に植民してきた家族を題材としている。このサガに描かれている時代をサガ時代(930-1030または1050)という。
- (18) 「5大サガ」と呼ばれるエギルのサガ, ニヤールのサガ, ラックス谷のサガ, エイルの人々のサガ, クレティルのサガもこの時代に書かれた。
- (19) 山室, 前掲書, 112頁。
- (20) 当時のヨーロッパ文学はまだラテン語の韻文が主であったため, サガのような自国語による散文は特殊な例だった。Jan de Vries は西ヨーロッパの中世初期には注目すべき散文学がアイスランド以外では発達していないと述べている。(Jan de Vries, *Allnordische Literaturgeschichte*, Walter de Gruyter & CO, Berlin, 1966, p.318)
- (21) Jan de Vries, *op.cit.*, p.178.
- (22) *Ibid.*
- (23) 山室, 前掲書, 112頁。
- (24) Jan de Vries, *op.cit.*, pp.179-180.
- (25) このため, 初期のサガはキリスト教の影響が強く, ラテン語で書かれたものもあった。例: オーラフトリギュバソンのサガ (Jan de Vries, *op.cit.*, pp.242) しかし教会が文字によって記録することを一般大衆に示したことはサガ成立の土台を作ったといえよう。
- (26) 注(18)参照。尚5大サガは, 谷口幸男, 『アイスランド・サガ』, 新潮社, 東京, 1979年の中に全部邦訳されている。
- (27) 例えば, 最も古いサガと言われる「オーラフのサガ」には奇蹟の場面が多く出てくるが, これは編者(おそらく修道僧)が修道院の図書館にある目録から取った題材であると考えられる。当時のヨーロッパでは奇蹟の話が入った聖人の伝記・言行録などは一般的であった。(Jan de Vries, *op.cit.*, p.240)
- (28) アイスランドは 930 年の全島集会で憲法が採択され, アイスランド共和国が成

- 立した。全島集会は島全体の重要な問題が討議される場であるが、その長（法の宣言者という）は何の権力も持っていない。（Spencer, A., *The Scandinavian States and Finland*, Oxford Univ. Press, Oxford, 1951）このため古ゲルマン風の理想国をこの新植民地に打ちたてようと努力した見方もされている。（山室, 『サガとエッダの世界』社会思想社, 1982年, 50頁）
- (29) この時代は首領同士のみならず、首領の所有にあった教会を独立させようとした司教とも争いが生じていた。（同上, 106頁）
- (30) 山室, 前掲書, 1980年, 23頁。
- (31) サガに登場する独立し、自由を愛する豪族達の姿は、植民地状態から脱しようとしていたアイスランド人達を刺激したといわれる。（Foote, Peter, "Review Article: New dimensions in Njáls Saga," *Scandinavika*, vol. 18-1, 1979, pp.49-58）尚、アイスランドは13世紀末にノルウェー支配下に入ってから20世紀前半まで独立国家ではない状況が続いていた。
- (32) Ker, W., "Epik und Romanze (1908)," *Die Isländersaga*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1974, pp.43-44.
- (33) Heusler, *op.cit.*, pp.258-259.
- (34) *Ibid.*
- (35) Jónsson, F., "Die Geschichte der altnordischen und altisländischen Literatur (1923)," *Die Isländersaga*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1974, p.130 から再引用。
- (36) Liestøl, Knut, "Die Ursprung der Isländersagas (1930)," *Die Isländersaga*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1974, p.157.
- (37) Baetke, *op.cit.*, p.IX.
- (38) 谷口幸男『サガとエッダ』新潮社, 東京, 1976年, 92-93頁。尚、( )内は筆者記載。
- (39) Liestøl, *op.cit.*, p.138.
- (40) Liestøl, *op.cit.*, p.140.
- (41) *Ibid.* 但し、( )内は筆者記載。
- (42) Liestøl, *op.cit.*, p.141.
- (43) Bugge, *op.cit.*, p.63.
- (44) Andersson, *op.cit.*, p.149. 但し、( )内は筆者記載。
- (45) Baetke, *op.cit.*, pp.IX-X.
- (46) Andersson, *op.cit.*, p.151.
- (47) *Ibid.*
- (48) Baetke, *op.cit.*, p.XI
- (49) Liestøl, Knut, "Tradition und Verfasser in der isländischen Familiensaga (1936)," *Die Isländersaga*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1974, p.205.
- (50) Jónsson, *op.cit.*, p.131.



- (51) Bugge, *op.cit.*, pp.73, 78.
- (52) Jónsson, *op.cit.*, p.133.
- (53) Jónsson, *op.cit.*, p.131.
- (54) Heusler, *op.cit.*, pp.254-256.
- (55) Liestøl, 1936, *op.cit.*, p.208.
- (56) Jónsson, *op.cit.*, p.130.
- (57) Heusler, *op.cit.*, p.259. Bugge, *op.cit.*, p.63. Liestøl, *op.cit.*, p.162-163. Jónsson, *op.cit.*, p.132.
- (58) Jónsson, *op.cit.*, p.132.
- (59) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.145.
- (60) *Ibid.*
- (61) *Ibid.*
- (62) Heusler, *op.cit.*, p.259. 傍点は筆者記載。
- (63) Heusler, *op.cit.*, p.259.
- (64) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.146.
- (65) Bugge, *op.cit.*, p.63.
- (66) Bugge, *op.cit.*, p.66.
- (67) *Ibid.*
- (68) Bugge, *op.cit.*, p.78.
- (69) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.149.
- (70) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.150.
- (71) Liestøl, 1930, *op.cit.*, pp.162-163.
- (72) Liestøl, 1930, *op.cit.*, pp.141-142.
- (73) Heusler, *op.cit.*, p.260.
- (74) Heusler, *op.cit.*, p. pp.255-256.
- (75) Heusler, *op.cit.*, p.256.
- (76) Heuslerはそれが多くの口承された要素から成立したサガを指して使われている「伝統的サガ」(Traditionssaga)と同義と考えている。(Heusler, *op.cit.*, p.261)
- (77) Jónsson, *op.cit.*, p.132. Jónssonは後者の芸術用式のサガも口承と同じく古いと考える。
- (78) Liestøl, 1936, *op.cit.*, p.213.
- (79) *Ibid.* 傍点は筆者。同様に Jónssonも自分がbook-prose論者と考えられていることに不快の念を示している。(Jónsson, *op.cit.*, p.132)
- (80) Heusler, *op.cit.*, p.260.
- (81) Heusler, *op.cit.*, p.261.
- (82) *Ibid.*
- (83) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.150.
- (84) *Ibid.*

- (85) Liestøl, 1930, *op.cit.*, pp.154-155.
- (86) *Ibid.*
- (87) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.151.
- (88) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.156.
- (89) *Ibid.*
- (90) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.157.
- (91) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.155.
- (92) Liestøl, 1930, *op.cit.*, p.164.
- (93) Jessenはfree-prose理論優勢の1872年に“Glaubwürdigkeit der ‘Egilssaga’ und anderer Isländersagas”を発表したが、これは現代の我々の歴史概念に基づいたbook-prose理論の論述である。
- (94) Nordalは1940年に“Hrafnkatla”をやはりbook-prose理論の立場から発表した。

## SAGA'S HISTORICAL VALUE

## — Free-prose, Book-prose Theory Reconsidered —

## ◀ Summary ▶

Mayumi Furukawa

Saga, the old Icelandic prose, written mainly in about the 13th century, has attracted many scholars since the end of the 18th century. Surveying the main stream of the saga study, we find, so called, the free-prose theory and the book-prose theory, which disputed with each other almost for a century. The scholars at that time had paid no attention to any other theory, that could have been otherwise usefully applied to the saga study. Today, on the other hand, few scholars take interest in that debate. I argue that now is the time to reconsider the dispute without supporting either side of theory.

I examined the treatises written between the latter half of the 19th century and the beginning of the 20th, when free-prose theory was predominant. With regard to this theory, I found the following interesting points. Firstly, the opinions of the defenders of free-prose theory are not in common. Secondly, the historical value of the sagas, which they insist, differs from that of today. The history they mean is what the medieval Icelanders believed to be history. Therefore, ghosts, dreams, and the like could be counted as historical facts from the viewpoint of free-prose theory. Thirdly, the defenders of free-prose theory do not deny the literary and artistic characters contained in the sagas. Although free-prose theory has lost its importance in the study of the sagas, I conclude, for the above-mentioned reasons, that it is worthy of reconsideration.